



Title	脇田修名誉教授に聞く : 大阪大学の思い出
Author(s)	菅, 真城; 阿部, 武司
Citation	大阪大学経済学. 2010, 60(1), p. 35-49
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/46083
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【資料】

脇田修[†]名誉教授に聞く

—大阪大学の思い出—

菅 真 城[‡]・阿 部 武 司[‡]

2008年8月29日

於 大阪歴史博物館（大阪市中央区）

大阪高等学校の思い出

阿部 今日はお忙しいところ、ありがとうございます。大阪大学を中心に、それにゆかりの深い旧制大阪高等学校のご記憶も含めてお話をうかがいたいと思います。

最初におたずねしますのは、大阪高等学校についてです。先生は大阪高等学校に在籍されましたが、そちらに進学された理由、高校の生活で印象に残っている事柄について、まずお話しいただければと思います。

脇田 私が大高に進学したのは、私の叔父が大阪高等学校から阪大の理学部を出まして、長く大阪女子大学の化学の教師をやっていたためです。その叔父から、学校や学風、またクラシック音楽までいろいろ話も聞いていました。私は府立北野中学の生徒ですが、旧制高校は4年から受けられるんですね。みな通常は、4年と5年で受けるということで、私は4年から受けさせてもらって、運よく通ったということです。

なぜ大高を選んだかと言うと、先の叔父がいたことと、昭和23年の戦後の動乱期で、まだ落ち着いていないときですから、やはり大阪の

ほうが通学しやすいということで大高を選んだんです。

私は大阪高等学校に入って大変よかったと思っていますのですが、それは非常に特色のある先生がおいでだったからです。一般的によく知られているのは犬養孝先生。先生の授業は2コマありまして、その1つの『万葉集』はもちろんです。もう1つは西鶴の『日本永代蔵』をやってくださいました。これは非常に印象深いもので、それで私は西鶴が大変好きになりました。歴史をやるなら大阪をやろうかなと思っていましたが、先生の話聞いて、すっかり西鶴が好きになって、彼の時代も好きになったということなんですね。後に犬養先生にその話を申し上げたら大変喜んでくださって、「実は大高が最後なので、私は『万葉集』だけではなくて、大阪の学校だから西鶴をやろうと思った」とおっしゃっていました。ですから、その年だけ講義をされたのですが、西鶴の表現などを説明されるのも、先生のことでですから非常にうまく話をなさしまして、すごく印象に残っています。それが一つです。

もう一人は石井孝という先生がおられました。この方は日本史の先生で、そのあと阪大の教養から横浜市立大学へ移られまして、そのまま停年を迎えられたのですが、幕末外交史や貿易史の日本最高の権威でした。

先生の時代は、私たちもそうなんですが、日

[†] 大阪市文化財協会会長 大阪歴史博物館館長
大阪大学名誉教授

[‡] 大阪大学文書館設置準備室講師

[‡] 大阪大学大学院経済学研究科教授

本史ではいわゆる講座派が非常に力を持っている時代で、石井先生の講義というのは、その講座派の核になるようなことを話されました。きちんとレジュメになったパンフレットをつくられて、原始・古代から近代まで、1年で見事な講義をされました。私は、そのパンフレットをまだ残しております。そういう石井先生の講義を聴いたおかげで、私は日本史を専攻しようと確信を持ったわけですね。

私は小学校で日本史を習ったのですが、それは戦争中の、いわゆる皇国史観という天照大神から始まる歴史を習いました。そして中学2年で敗戦になって、実は中学では日本史を習わなかったんです。まだ新しい教科書ができなくて、教科書がない時代だった。ですから全然習わなかったのですが、大高へ行って石井先生の講義をうかがって、戦前からきちんとした学問として成果があることを知り、これならと言うと、ちょっと若いから不遜なんでしょうけれども、これなら勉強してもいいだろうなという気持ちになったことは事実です。

その2つがあって、私にとって大阪高等学校は非常に印象が深い学校だと思いますね。ただ、高等学校としては変わった雰囲気のある学校です。第一に門がなかった。釜洞（醇太郎）先生や金森（順次郎）先生もおっしゃっていたでしょう。上町線の北畠駅と校舎とのあいだに門はあったらしいんです。けれども、校舎の目の前に産業道路がつくられて、いつの間にか門がなくなったと言われていました。

だから校舎は産業道路に面していて、あの時分のことですから、よく学校ではストが行われてピケを張られる。すると、教室の窓を開けて、窓を開ければ、すぐに道ですから、そこからこっそり抜けて逃げたという記憶がありますね。

また、われわれの学年には、文科甲類（英語主体）ではなくて文科乙類（ドイツ語主体）に、萬金映子さんという初めての女子生徒が入られました。その方が大阪高等学校唯一の女子生徒

です。あとは阪大へ進まれ、大丸に入られたと思いますが。

そして、そのころは、よくアメリカ軍の命令でフォークダンスをやらされた。女子生徒がいないから、みな野郎ばかりで組んで踊っていたんです。そうしたら体育の教師が、その一人の女子学生、萬金さんを相手にして踊ったので、みんなが「くそっ」と言って怒っていたのを覚えてますね（笑）。

そのとき、私は2つのクラブに入っていました、1つはハンドボール部で、1つがコーラス部でした。ハンドボールは、実は北野中学のときに送球部に入れられたんです。なぜかと言うと、ハンドボールはドイツ発祥のスポーツで、戦争中ですから日独伊三国同盟がありました。そこで、それまで中学にはハンドボール部がなかったのですが、文部省から送球部をつくれというお達しがきた。その当時、ハンドボール部は送球部と言っていました。それで北野の先生が、そのときクラブに入っていないくて、そこらへんで目の付いた生徒に「やれ」という命令を出されて、私も送球部へ入れられたんです。それが2年生のときだったと思います。

そのまま戦後も続けましたが、大高へ行っても、京大へ行っても、ハンドボールの先輩がいて入れというので、結局、京都大学までクラブに入っておりました。ただ、私はフォワードで、ちょっと膝を痛めたものですから、京大の専門課程に入るときにはやめました。

それから、コーラスをやりました。これは自分で希望してコーラス部に入ったのですが、そのときのコーラス部キャプテンは片岡通昭さんという方で、なかなか幅広く活躍している人でした。その当時としては珍しく、大阪放送局BKで放送したこともあります。

また、当時のコーラス部のなかには、いまでもコーラス関係で活躍されている方がおられまして、よく知られているのは多田武彦という方です。この方は作曲家で、いまの日本のコーラス

関係では、ずいぶん彼の作曲・編曲したものが使われています。そういう方がおられて、コーラス部もなかなか楽しかった。ただし女性がないものですから、大谷女専（大谷女子専門学校）のコーラス部へ話をつけて、混声合唱をやったこともあったと思います。そういう時代でした。

あのころは、まだ戦後のことですから、コンパをやったというのは、あまり記憶がないですね。一度ぐらいかな、コーラス部でコンパをやったと思います。そんなときでも、キャプテンの片岡さんの家だったと思うのですが、誰かが自分の家から、かんてき（七輪）を持ってきてやったという記憶がありますね。大阪高等学校の時代は、そういうことで過ごしました。

私どもの文甲のクラスにも、有名な人では開高健君がいて、開高君はいつも真ん中の一番後ろの席に座っていましたね。評論家で活躍している向井敏君とか、いろんな人が出ています。もう亡くなりましたが、内田洋行の社長をやっていた久田孝君や積水ハウスの奥井功君もいました。

大阪高等学校は、たった1年で追い出されて、それは予想外でかんかに怒っていました。入学して、やれうれしい、3年間伸び伸びしようと思ったら、追い出されて、また試験を受けさせられたということで、みんなでぶつぶつ思ったんです。

だいたい旧制高校への進学は難しく、旧制高校へ入っていれば、ほとんどが大学へ行ける。定員の関係もありますが、よほど難しいところでない限りは、みな無試験に近いかわりで行けたわけです。受けるのが難しいというのは、東大法学部ぐらいではなかったかな。

大高へ来る大阪人間には、東大法学部に行くなんて、あまりいないですよ。私たちのクラスでは4人だけ、外交官志望だった中村泰三君たちが受けました。中村君は大使までなって、いまは引退されたと思います。そういうことで、

みんな割合伸び伸びしていたと思います。先生もよかったし、たった1年で、3年間いられなかったのは残念でしたが、いい経験をさせてもらったと思います。

菅 大高が1年で終わってしまうとお知りになったのは、いつぐらいのことですか。

脇田 ちょっと記憶にないですが、最初はそんなことは思っていなかったですよ。だから、おそらく秋ぐらいではないでしょうか。みんな、ぶつぶつ言って、ごちそうを見せられて取り上げられたようだとか、いろんなことを言っていました。

それから先生方は、大阪大学へ行かれましたね。ですから旧制高校の学生も、大阪大学には無試験でいけるんだとか変な噂が飛びまして、みんな遊んでいました。そして実際は試験があるんだと覚悟したのは、年が変わってからだったと思います。こうなったら受験勉強をしなければしかたがないということで、慌てて勉強したことを覚えています。

私は大高だから大阪大学に行ってもよかったんですが、阪大に法文学部ができたのは昭和23年ですから、そういう意味で、どうせ試験を受けるのなら京都を受けようと。そちらのほうが史料もそろっているし、私は研究者になろうと思っていたので、それなら京都へ行こうと思って京都大学を受験させてもらったんです。また、私の家は梅田ですから、京大でも通えた。そういうことで京都を受けたんですね。

大高のわれわれのクラスには40人ほどいたのですが、大阪大学と京都大学とは半々ぐらいではなかったのでしょうか。1人だけ東大へ行った。また開高君は阪大を受けたのだと思いますが、落ちたんですね。そして彼は大阪市立大学法学部へ行った。その時分から彼は小説を書いていましたから、受験勉強なんて、あほらしくする気がしなかったのではないかと思うんですが（笑）。そういう状況だったと思います。

ですから高校生活というのは、先生方のこと

が一番よかったですね。それと特殊な風俗生活ですよ。例の黒マントを着て、すごい下駄を履いて、頭は丸刈りにもしないで髪をぼうぼうと伸ばしたり、ある意味では、みんな好き勝手なことをしている時代だった。だから私は、いまの学生さんを見てみると、ああいう時代がないというのはどうかなと。やはり旧制高校みたいに3年間、ちょっとエリート的な雰囲気は強いのですが、伸び伸びさせてもらったというのは面白いと思うんです。

菅 いま「大阪大学の歴史」という授業をやっておりまして、私は旧制高校を担当しているのですが、授業のあとの感想で、そういう伸び伸びとした大学入試を気にしないのがうらやましいというような人がいたり、女子がいないところなんか想像できないから嫌だという人がいたり。そういう感想を書いていますね。

脇田 あれはちょっと特殊な時代だったんですが、それまでは、それが普通でしたからね。

京都大学文学部へ進学

脇田 そういうことで、そのあと私は旧制高校から新制大学への受験ということになったんですが、まず公立などの学校では3月に受験がありまして、国立は6月に試験で9月から始まるというかたちになりました。

そのとき私は、公立のどこかを一応受けておこうと思って、大阪市立大学を希望し、大阪市大なら経済がよいですから経済学部を受験して通りました。そして6月に京大を受験して、こちらも通ったので市大はお断りに行ったのですが、市大のほうは「どちらですか」と、私がどこを受けて入ったのかを調べておられたようです。

最初、新制京都大学の場合は、旧制の第三高等学校が3年生だけになっていたの、そのあいた教室で授業がありました。われわれは吉田分校と言っている三高の跡地で授業を受けて、

その次の年から、教養部は宇治の火薬庫跡の宇治分校で授業がありました。われわれは、それはなしで専門へ行かせてもらった。

京大の教養部時代、すでに私は日本史をやろうと思っていましたので、歴史学研究会というのをつくりました。指導を受けたのは柴田實先生です。先生は心学の柴田鳩翁のご子孫で、思想史をやっておられて、ずいぶん私たちには目をかけていただきました。

あとは大学の普通の学生生活を送ったのですが、その歴研のボックスの隣は自治会のボックスで、いろんな人が来ていましたね。小松左京君もその一人で、彼は教養時代には学生運動をやっていたので、ペンネームの「左京」に「左」が入っているのも、そういうところがあるのでしょう。

ただ、旧制と新制が一緒だったものですから、旧制の方に言わせると、新制の連中は結束が固くて、ずいぶん好き勝手をやったと。私らと一緒に旧制の上横手雅敬さん（のち京大教授）などは、そういうふうに書いておられます。しかし、われわれのほうから言うと、旧制の人からは「新制ですか」と言って、ばかにされているような気がして、何となくみな突っ張っていたようなところがあったと思いますね。

次の世代からは、もう旧制の方がいなくなるので、そういう意識が薄れてきたと思うんです。特に3年たてばなくなっていましたから。だけど、われわれの世代は新制1期ということで、いろんなことが初めてで先生もわからないし、こちらはどうしていいかわからないということが、けっこう出てきましたね。

菅 学生生活も新制は新制、旧制は旧制で固まるものなんですか。それとも同じ歳だったら、相互の交流とかはあったんでしょうか。

脇田 特に仲のいい人は旧制にもおられましたね。だから学生自体は普通に、何となく固まっていた。ただ新制同士のほうが、やはり仲がよかったように思います。大学院に行きますと状

況が変わりまして、新制大学院生の数が多いんです。割合まとまって入るでしょう。大学院に入った人は、新制1期は多くて日本史は5人行っていますからね。

旧制の方は、大学院に入られたら、だいたい特別研究生と特別奨学生という奨学金をもらっている人だけが1年に1人ずつ残られるという状況で、ほかの方はみんな就職をなさって大学院へ来られるシステムですから、新制のほうが、よくまとまっていたんです。旧制の方に言わせると、新制はまとまっていて、のさばっていたというイメージでしょう。

もう一つは、やはり新制になって、修士論文とかドクター論文というのが研究の出発点で制度的に年限もきちんとしたわけです。旧制の場合はマスター論文ありませんし、ドクター論文も、かなり年配になってから研究の集大成として出すということでしたから、そのへんはずいぶん違いました。

そして、私がドクターの終わりのころ、小葉田淳先生が住友修史室という住友の歴史研究室の指導にあたられることになりました。すると、先生は演習の席上で「私は今度、住友へ行くことになった。もし住友の史料が見たいという者は、私についてくると見られるよ」とおっしゃったんですね。それで私は、時間が終わるなり飛んで行って、「先生にお供させてください」とお願いしました。

私は大阪がやりたかったので、住友の史料が見られるチャンスを逃すことはないと思って、お願いしてやらせてもらいました。おかげで、住友とはずっと関係があって、いまもいろいろと刊行物もいただいていますし、『住友吉左衛門』という本を執筆中です。そういうことで住友の歴史と関係ができたのも、小葉田先生のおかげなんです。

結局、ドクターが終わりまして、それから浪人となり、住友の嘱託ということで、正規の給料ではないのですが、少しお金をいただいた

りして浪人時代を過ごすことになりました。

そのころは、頼まれて、YMCAの予備校へ行ったこともあります。けっこう私の授業を受けた人はおられて、みんな黙っておられるんですが、近年になって、私も受けたと言われる方が阪大の教授にもおられました。名前を言えば、ご存じの人が受けておられますけどね。

さて、ちょうどドクターを終わってしばらく経ったころ、その住友修史室からの帰りに小葉田先生が、「脇田くん、このあいだの教授会で新制のドクターの規定が決まった。3年以内ならコースドクターということになったから、君、出したければ出したまえ」とおっしゃったんです。それで私のことですから「ありがとうございます。出させていただきます」と（笑）。考えてみたら厚かましいんだけど、そういうことを申し上げまして、結局、大学院を終わって3年目の3月に論文を出したんです。

そのとき、京大では日本史で2人、社会学で2人の4人が出しました。私は脇田ですから「わ」で、日本史のもう1人は池田（敬正）君だから、私は4番目ぐらいだと思っていたら、ドクターは出した順番、受理した順なんですね。年度末3月最後の日の4時から5時までのあいだに4人が持って行ったのに、間一髪で私が早かったらしくて、私が京大の課程博士の1号をいただきました。あとにも先にも、そういうのではないと思います。

私の先生と社会学の先生は、新制度でアメリカ流のドクターで、早く出すようにと学生にお勧めになったんです。けれども先生によっては「まだ早い」と言う方もおられて、最初の段階では、講座によって、すごく違いがあったように思います。私は運よく、そういうことでした。大阪大学では、経済学部の宮本又次研究室では早かったと思います。

また、私が出したときに旧制も最後だったので、いろいろありまして、ドクターを取ったときには生意気だとか、功をはやっているとか、

ずいぶん言われました。こちらにしてみれば、制度的に決まったのだから、修士が終わったら修士論文を出すのと同じようなつもりでやったんですね。先生にも勧めていただいたから、まとめるのはしんどかったけれども、頑張って、出したらいいと思ってやったんです。しかし、ずいぶんそういうところで、旧制と新制の感覚がずれていたように思いましたね。

しかも、あれは公表する義務があると書類には書いてあるわけです。私は経済学部で堀江英一先生のところへも行ってたので、堀江先生のお世話で本にしまして、それが私の最初の本（『近世封建社会の経済構造』お茶の水書房、1963年）になったわけです。ですから、研究としては非常にうまく、運よく行けたと私は思っています。

大阪大学文学部に赴任

脇田 そして、そのあと浪人していたんですが、いろいろありました。住友修史室の嘱託をやっていて、大学では龍谷大学に2年半お世話になり、昭和43年に大阪大学の文学部へ寄せていただくことになったわけです。

大阪大学の文学部というのは、昭和23年にできたものですから、だいたい京大と東大の卒業生でできあがったということですね。そのために初期の段階では、講座によって、これは東大系、こちらは京大系と。いまはだいぶ雰囲気が変わっていると思いますが、例えば史学科で申しますと、東洋史は東大系、西洋史や日本史は京大系の人が入っておられたという状況ですね。講座によって、かなり違いがあったように思います。

それでトラブルが起こったことはないのですが、人事なんかのときには、東洋史だったら東大の人を採られるだろうというふうに、みんなが暗黙の了解でやっていたようなことなんですね。だから、それで何かもめたことはないと思

います。まあ人事的には、だいたいどこも、あまりめめないところですよ。

そのあと、文学部として思い出すのは、美学科ができたということですね（1973年）。あれは大きかったと思います。

また、その前には教育学科と哲学科の心理学・社会学が独立するという問題があって、人間科学部に発展したんです（1972年）。あれは社会学部と思っていたら、人間科学という名前になったので、みんなびっくりしました。ちょっと耳慣れない名前で、反対でもないんだけど、珍しいなという気分はありましたね。いまになって思うと、あれだけ名前が一般化したものですから、先駆的な動きになったんだなという感じはします。

阿部 いまのお話で、聞き慣れない人間科学部という名前に驚かれた方は多かったと思うのですが、そのアイデアは、どの先生が出されたのでしょうか。

脇田 いや、それは知らないんですよ。今のうちにお調べ下さい。

最初の学部長をやる予定の方が、同和問題で過ちをされたため、部長をされなかったとか、創設にともなう苦心もあり、そのときにはかなり気分も落ち着きませんでした。

美学科をつくるときは、木村重信さんが中心でいろいろやっておられたわけですが、美学科のメンバーは、われわれは専門的にわからない状況がありました。だけど文学部としては、美学科はできてよかったのではないかと、いまになってみたら思います。非常に広がりがありましたから。

同和問題委員会委員としての活動

脇田 あとは全学の委員としてのところですが、同和問題の委員にされたんですね。あれは何年ごろか調べていただいたらわかるのですが、ちょうど「特別措置法（同和対策事業特

別措置法)」などが出て（1969年）、いろいろ運動が活発化するときでした。おそらく先生に学生が質問したのではないかと思うのですが、そのなかで教養部と文学部の2つで差別発言が起った。

それは先生が「特殊部落」という発言をされたということでした。実は「特殊部落」という言葉は、少し部落問題をご存じの方は、かえって差別用語だとは思っておられないんです。というのは、「水平社宣言」の冒頭に出てくる。ああいう宣言に使っているから大丈夫だと思って使われたのではないかと思うんです。

教養の先生が何という方かは、ちょっと私も思い出せないのですが、それは調べられたら、すぐにわかると思います。文学部では、教育学のMさんが発言された。大学院の学生だったと思うのですが、質問か何かで話をしている最中に言われたんですね。そして差別発言をしたということになった。

「特殊部落」というのは差別用語ですが、言葉を言い換えても差別の現実是不変なのだから、この言葉をそのまま使うということで、水平社の同人はあえて使っているんですね。それは差別的要素を含んでいると承知のうえで使っておられるのですが、それがわからないものだから、こうした2人の発言があった。そこで、芦原橋の解放同盟本部へ来いとなったわけです。

そのときは釜洞先生が総長をされていて、私は対岸の火事ではないけれども、こちらにいろんなことが影響するとは思っていなかった。それはあたりまえで、まだ来て3年目ぐらいのちんぴら助教授ですから。

ところが、時野谷勝先生に「脇田君、ちょっと来ないか」と言われて、「どこへですか」と言うと、「いや、本部へ行くんやけど、ちょっと君、来てくれ」と。それでタクシーを呼んで本部へ行った。そうしたら釜洞先生のところへ連れていかれて、「君、頼む」と言うわけです。部落

問題のことをやってくれと総長に言われたら、私が嫌とも言えないでしょう。

私は困ってしまって、「私は実は、まだ来て3年になっていないちんぴら助教授です。それが大阪大学でこの問題を取り扱うといっても、学内で抑えも利かないし、対外的にも困るから、きちんとした教授で、しっかりした人を付けてほしい」と。どういう言い方をしたかは忘れましたが、要するに、しっかりした教授を選んでください、その方と私とが一緒にやらせていただきますよと先生に申し上げました。それで、わかったということで引き揚げたんですね。

いまでも覚えているのは、そのときに私が部屋を出ようと思ったら、総長が立って、机に手を付いて頭を下げておられた。もう、それを見たら、これはサボれないなと思ってね。あれはいまだに覚えています。

結局、そのあとは理学部の内山龍雄先生がやってくださったんですね。内山先生と私とで10年ほどやらせていただいた。内山先生はすごい先生でした。たしか理学部の理論物理で、ご専門でもえらい先生だったらしいのですが、それまで部落問題を、ほとんどご存じないのに、すごくよく理解されるんですね。ご本人もだいたい勉強されたのかもしれませんが、本当にすごい人で、ずいぶんいろんなかたちで動かれました。私なんかは、とてもできないようなことまでやられましたね。その先生が決まり、全学同和問題委員会ができて動くことになったわけです。

そのときは、最初に解放同盟のほうから、総長と学部長の全員が本部へ呼ばれて糾弾会があったわけです。私は、みなさんが座っている一番後ろで話だけうかがっていたのですが、一人一人への糾弾方式で「おまえはどう思う」と聞かれていた。そして2人か3人すんだときに、釜洞先生は血圧が高いので、ふらっとされたんですね。そうしたら、同盟の人でも前から聞いて

いたのかもしれないけど、慌てまして、糾弾会をさっとやめられた。それは私も驚きました。

ただ、釜洞先生をご存じの方はよくわかると思うのですが、非常に率直な方で、あまり手練手管とか外連味の無い方なので、冒頭にはっきりと、実は私はこの問題についてもあまり知らなかった、申し訳ない、これからきちんとやらせてもらうというような意味のことを語られたんです。ですから、おそらく同盟の人も、いい感情を持ったのではないのでしょうか。それで先生がふらっとされたので、すぐにやめた。

しかし、そういう約束をされたものですから、結局、私が総長に言われて、内山先生とやることになった。最初の3年ほどは、いろいろ、あらゆる意味の問題が起こって大変でした。私は原則として、問題が起こりましたら、そのことをきちんと記録して、分析して、それについて、ある程度の評価をして文章をまとめておくことをしました。でも1回、事が起こると、落ち着くまでに1件あたり3カ月かかる。すると、最初のころは1年に3回ぐらい問題がありましたから、1年中やっているようなもので、あのときだけは、さすがに待兼山の坂を上がるのが嫌で、今日は何事もないようにと思って学校へ行っただけを覚えています。

ですから最初は、ちょっと学生に質問を受けて問題のあることを言う人がいたんですが、3年ほどたつと、それがあまりなくなって落ちてきましたね。結局、7、8年目ぐらいからは落書きになったのではないのでしょうか。

落書きも、他の大学で落書きが起こると、同盟に呼ばれたり、いろいろあったのです。それで、そのうち大阪大学でも落書きが起こるかもしれないと、こちらはちょっと覚悟をしていた。ですから、落書きが起こったときには、普通は「申し訳ない」とか何とか言うのですが、少し強気に出まして、逆に大学としては、こういう落書きをする者は品性が悪い、下劣な人間だというような文章を書いて張り出したんです。そ

の文章はどこかに残っているはずだから、見ていただいたらいいのですが。

すると幸いなことに、それで収まりまして、10年たったことですからと、私は同和委員を辞めさせてもらったんです。ちょうど内山先生も停年になられるというので、あとの方に引き継いだんですね。同和委員長を教育学の元木健さんがやってくれました。

私自身は、それまで実は、歴史のなかでも部落史をあまりやっていなかったんです。ただ阪大に事件が起こる前に、部落の方が自分の村の歴史を知りたいというので資料集をつくられた。それは播州篠山の近所の村ですが、運動をやっている方が高校の先生を動員して、近世の文書などを集められたものです。そして京都の部落問題研究所に、それを本にしてくれと持ち込まれたので、研究所の中心だった東上高志さんが、刊行するのなら、やはり専門家がきちんと古文書を読まなければいけないというので、私のところに電話をかけてきて、「あんたやってくれへんか」と言うわけですね。ちょっと古文書を読んでくれと。それで私も「そのぐらいのお手伝いはするよ」と言って引き受けたんです。

そして資料集を出しました。『播磨国皮多村文書』（部落問題研究所、1969年）というかなり大きな資料集で、後ろに解題を書きました。だいたい部落問題の場合は、その存在が明らかになるので、歴史のなかでは資料を出すこともしないんです。自治体の歴史をつくったときでも、それまでは部落関係のことは全部オミットしていた。

私が1950年代にやった『泉佐野市史』という古い市史があります。いまは新しい市史をつくっているのですが。そのときなどは、地域の絵図がありますね。地図の上には、部落のことがきちんと書いてあるんですが、印刷する前に墨をぼつと入れて読めないようにする。しかも墨を打ったとわからないように、ぼつと入

れて印刷したんです。そのときには、そうするものだ、委員長に教授に教えられました。

そういうことですから、だいたい自治体史のなかには部落があっても書かないんですよ。それが「特別措置法」が出て地域指定になりましたから、それ以後は、かなりオープンになって、市史とかいろいろなところに取り上げるようになったのです。私のつくった資料集というのが、その最初なんです。やはり地元の人希望してつくるということでしたから、できたということですね。

それで私は、そうした本をつくったというので専門家にされてしまって、阪大の場合にも、部落問題で「おまえがやれ」ということになったんです。私はその資料集はお手伝いしたけれども、実はそれまで部落史はやっていなかった。そして阪大で委員をやるようになってから、こうなったら私も自分の仕事としてやろうというので、むしろ、それから部落史を本格的にやらせてもらうようになったんですね。

ただ、部落問題研究所は解放同盟と対立していました。それで同盟は京都に解放研究所をつくったのですが、その所長も歴史家で、私と友人で、そういう友人がいましたので、いろんなことを助けてもらいました。大阪も、人権博物館におられる学芸員には仲のいい方もいます。それで、阪大ではかなりつらかったのですが、そのつながりで助けてもらったということですね。大阪市大の原田伴彦先生にも、最初の大学での講演会の講師をお願いしたり、お世話になりました。

部落問題については、そういうことで10年間やらせていただいたのですが、同じ人間がやるのは請負で良くないと、内山先生の退官と一緒に私も委員を辞めたのですが、あとは教育学の元木さんがやってくださった。

そして人間科学部には、部落問題を取り扱う講座（社会教育論講座、1974年設置）ができているでしょう。あれを最初に文学部でつくる

うという話があったときには、はっきり部落問題としてわかるような講座名にするかしないかという議論もあったのですが、結局広い意味での講座名になっています。

また、部落問題については、解放同盟の関係で村越（末男）さんに講師に来ていただきました。そのあと村越さんは、（大阪）市大の先生をされています。運動体としての考え方をリードしていた方で、教養部などの授業にいられていました。

女子学生ジープン問題

脇田 また差別問題で言うと、ちょっと変わったことが文学部におこりました。『なにわの葎あし』（1994年）にも書いたと思いますが、ペーダーというアメリカ人の英語講師が、女子学生がジープンをはいてきたら授業に出さないという不思議な事件がありました。岸畑豊先生が学部長のときです。女子学生が怒りまして、なぜジープンをはいてきたら授業を受けてはいけないのだと、学部長のところに何人かで抗議に来たんです。

それで岸畑先生は困ってしまって、私を呼んで、「脇田さん、すまんけど、学生と会ってくれ」と言うわけです。また、「あなたの奥さんもおられるということだし」と（笑）。なぜ、女房がいたら私が会うんだと思ったけれども、まあ、女房（脇田晴子氏）は中世史ですが、女性史をやっていますからね。

それで、しょうがないので、英文の藤井（治彦）先生と私とで会いまして、ちょっと話をした。ジープンは普段着、作業着だけれども、なんで受講するのはいけないんだと。私もそう思いますよね。なぜ女子学生がジープンをはいてきてはいけないのか。それで授業に出てはいけないなんて、けしからん。そういうわけのわからない話は、こちらにも理解できない。

しかし、はっきりと先生を非難するわけにも

いけないので、実はわれわれも非常に困っていて、何とか善処したいと思うから今回は帰ってくれという、まるでごまかしみたいなことを言いました。すると学生さんは、「まあ、それならわかりました」と言って素直に帰ってくれたんです。藤井くんは横で私が対応しているのを聞いて、終わってから、「脇田さん、何やむちゃくちゃ言うな」と。私はそんなにむちゃくちゃを言ったかなと思いましたけどね（笑）。

適塾・懷徳堂

脇田 あとは、あまり事件的なことはなかったように思います。50年史とか適塾とか懷徳堂などの委員をやらせていただいて。やはり、適塾や懷徳堂という外の方が入られている委員会はいい会でしたね。ずいぶん財界の方にも助けていただいた。

私が、そういうなかで、よく世間話までしたのは日本生命会長の弘世現さんでしたね。あの方はずいぶん熱心で、楽しそうに来てくださるんですよ。ついには私と、どこの食事がうまいとか、そんな話までさせてもらったことがあります。また、日本生命本社ビルの場所に懷徳堂があったので、ビルの南面には懷徳堂の碑を建てていただいたりして。

懷徳堂記念会の初代会長は住友吉左衛門さんなんです。住友修史史の関係者は号で春翠さんと言っていますが、西園寺公望の弟だった方が住友へ婿養子に來られて、その方が初代会長です。そういういきさつがあって、住友銀行の頭取が会長になられるという、何かの因縁みたいなものがあるわけです。案外、財界の方は、そういう由緒を尊重して、きちんとしてくださるんですね。ともかく懷徳堂の活動をやったのは、文学部としても外とのつながりができていいのではないのでしょうか。医学部は適塾を管理しておられますが、もともと外との関係が深いところだから、それほどでもないでしょうけど。

それから、適塾の両側を空地にするときも、適塾管理委員会が一生懸命にやりましたね。ちょうど東側の空地は隣が中華料理屋さんでしょう。いまは、どうなっているかな。だから何としても、あそこを空けたかったんです。こちら側は愛珠幼稚園とのあいだが空地になったわけですが、あれも各会社に助けていただいて両側を空地にできました。愛珠幼稚園自体が歴史的な一つの場所ですから、また南側も日本生命さんがビルとの間を広くして下さいました。適塾とともに、ああいうかたちで保存ができたというのはよかったと思います。

そのときは医学部や理学部の熱心な先生が、すごく頑張っておられましたね。私は先の本にも書いたと思うんですが、医学部の人らしく、あいつは適塾病にかかったと（笑）。非常に熱心な方がおられました。また、緒方家からも委員として緒方富雄さんや裁吉さんが来ておられて、いろいろ発言なさいました。

適塾と懷徳堂の2つは、大阪大学にとって、大事にしてもらったらしいものだと思います。大阪にとって適塾と懷徳堂は、近世からの史跡というか、歴史としては非常に大事なものですから、それを大阪大学が2つとも世話をさせていただいているというのは、いろんな意味でいいのではないかと思います。

大阪大学出版会について

脇田 あと、大阪大学出版会をつくる時に関係しました。まずスタッフには誰を入れるかというので、大西愛さんに入ってもらおうというのは初めから思っていたんです。彼女は国史出身の非常にできる人で、伊丹市史などをやっていて、阪大五十年史もやられたので入ってもらおうと。しかし、誰か専門家がいないと困るなというので、編集長として中津雅夫氏に来てもらったんです。あれは誰が推薦されたのかな。ちょっと覚えていないんですが。

そして、実際の出版会をやるについて、出版会のいろいろな実務的なことは、かなり東京大学出版会の人がやってくれました。例えば、問屋へ何パーセントで卸すかとかが問題になったり、取次店へ流していくルートみたいなことがあるのですが、そういう筋を付けるのは東大出版会の人がやってくださって、おかげさまで、ほとんど私たちは何も知らない間に開業できたということですね。

私は東大出版会から本を何冊も出しているのですが、あそこの編集局長とかトップの人とは仲がいいんですね。それで私が出版会のお世話をやるということを知って、大阪大学に出版会ができることは、われわれにとっても非常にいいことだから、できるだけことはしましよと言ってもらいまして、石井和夫さんや渡辺勲さんなどを含めて、あそこの中心の方が営業関係のことなどをやってくださったんです。

ですから、そのへんの取引関係のことは、全然こちらが気を遣わないままに、すっというてしまった。いまから考えたら、のんきな話だと思えるんですが、おかげでうまく出発できたと思います。

阿部 私は同僚の澤井実さんたちと一緒に、最初のころの阪大出版会から本を出していただきましたので、そのとき中津編集長に大変お世話になりました。

脇田 中津氏は、京都の化学同人に勤めていたんだと思います。私が関西の知り合いに、誰かいいい編集者はいないかと声をかけていると、「この人は、ちょっと個性は強いけれど、どうや」と言う人がおられた。ですから、「少々個性が強くていい。きちんと編集をやってくださる方ならいいですよ。そっちはどうですか」と言ったら、「それはきちんとやる人です」と言われたので、こちらもお目にかかって入ってもらうと。

しかし中津氏だけでは、まだ阪大では新人ですから、阪大のなかの関係がスムーズにはいか

ないだろうというので、大西さんが入ってコンビになってもらったんですね。そのときは、事務をやる人で1人推薦があったので入れたのですが、その人が一番だめだった。もう辞めたのですが。

阿部 事情は私も聞いております。

脇田 ご存じでしょう。ちょっと問題があって辞めましたけれども、先のお2人が中心でやってくださったので、それはよかったと思いますね。ですから、お2人と東大出版会のおかげです。

そして最初に私が心配したのは、最初の本、1号をどうするかということ。やはり出版社の性格も1号で影響するところが大きいので、どうしようかと思っていると、ちょうど山田信夫先生のご本があって、先生も本を出したいということだったので、しめたかと思ってね。山田先生の仕事は世界的なシルクロードのことだし、ちょうど出版会にはもってこいの。

阿部 ウイグル文書の研究でしたか。

脇田 そうそう、ウイグル契約文書の研究でしたから、これを1号にしようと思ひましてね。山田先生にとってもよかったんでしょう。あのような分野の本を、そう簡単に出してくれる本屋さんは少ないですからね。そして、こちらも、あれ（『ウイグル契約文書集成』1993年）を1号にしたおかげで、まあまあうまく軌道に乗ったということではないでしょうか。

実は東大出版会の方には、教科書でもうけなさいと言われていたんです。東大出版会の場合、例えば東大法学部の教科書を1冊出しますと、東大法学部は何百人といるので、それは1年で必ず売れるわけです。そして毎年売れるわけでしょう。少なくとも10年ぐらいいは、そのまま。そうやって基盤をつくったらどうかと。

阪大にも、それは考えておきなさいと言われていたんですが、残念ながら、うちと東大では学生数が違うので、その方式はあまり適用できなかったんです。教科書に何か使えないかなと

思ったけれど、それだけは成功しませんでした。

しかし、アサヒビールから3億円いただきましたので、それを基金にさせていただいて、使いながらうまくやった。ただ、あれも誤算があって、いただいたころには、3億円ですから、利息でかなりの部分が賄えると思っていたんです。そうしたら利息が下がったでしょう。それで全然予想が狂いました。

これも面白い話なんだけど、10年たったときに熊谷信昭総長と2人で、アサヒビールへごあいさつに行ったんです。そのときは傑作で、ちょうど10年たったから、おかげさまで出版会も順調に経営できていますと申し上げて退室したのですが、その時樋口廣太郎会長が、「今日はそれだけでおいでになったのですか」と言われた。どうもさらなる援助を頼みにくるのだらうと思われていたようです。退出して2人で、「しまった」と笑ったのですが。

文学部長として

阿部 大阪大学出版会までうかがったので、文学部長をされていたころのお話に進ませただいてよろしいでしょうか。

脇田 文学部長のときは、あまり何かをしたという記憶がないんです。年表でも見れば、わかるかもしれませんが。文学部長で努力したことは、教授会の議事を迅速かつ的確におこなって、5時までには終わることでした。文学部の教授会は長いんです。決まりかけると、必ずこれでは心配だという人が出てくる。紛争のときはすぐ、教授会が延々と続いたのでまいりましたね。経済学部の人たちは、紛争のときでも5時に終わって帰られる。文学部は延々と夜中までやるんです。あのときは、たまりませんでした。おまけに校舎が占領されていたので、豊中の小さなホテル、「アイボリーハウス」か。

阿部 「ホテル・アイボリー」は、いまでもありますね。

脇田 あそこでやったり、ついにはどうにもならなくて、梅溪昇先生の家が尼崎のお寺なので、その本堂でやらせてもらったりしました。

全体に非常に長いんですね。やはり文学部の先生というのは、例えば文学作品なんかでも、細部に至るまで分析されるので、心配になるようです。ですから、決まりかけると必ず意見が出る。それでずいぶん長引いてしまって、あれにはまいりました。

それ以外は、あまりありません。全体に紳士的な学部でしたから、それ以外でのトラブルはなかったです。

阿部 先生が学部長をされていた1990年4月から1992年3月までの時期は、教養改組や大学院重点化、法人化といった激変の前ですので、わりと安定している時代といえるでしょうか。

脇田 そうなんです。がたがたするような大きなことはなかったと思いました。ですから、私は割合、さっと議題をすませていたという記憶があつて。

菅 文学部の年表を見ますと、先生が学部長をやめられた次の月に、比較文学講座増設と出ております。

脇田 講座をつくるときは、どちらかというと、その学科の方が中心でやっていますから、それほど大きな問題はなかったのではないかな。全体の学部で認めたら、もう、さあっと動くということで。ですから、それもあまり印象に残っていないですね。何かをやったということもなくて。

私が阪大にいたなかで大きかったのは、学部以外のところでは、大学紛争と同和問題と出版会ですか。日本史研究室は、みな仲良くしていましたからね。

また考古学をつくったのは、一つの成功でした。あれは、ちょうど助教授ポストが空いたので、どなたに来てもらおうかとみんなで相談しましたが、そのときは古代・中世・近世・近代と先生がそろっていたんです。古代は教養部の

長山泰孝さんと東野治之さんがおられて、中世は黒田俊雄さん、私は近世で、梅溪先生は近代。

だから時代は全部そろっていて、ポストが一つ空いているから、阪大に考古学が欲しいと。阪大だけではなくて、大阪にとっても阪大に考古学ができるとよいだろうということですよね。それまで、関西大学はなかなかよい考古学を持っておられたけれど、阪大にはなかったわけですから。それでわれわれが相談して、将来的には考古学の講座ができればいいけれども、差し当たり日本史へ考古学に来てもらおうではないかと。

それで誰がいいだろうということで、都出比呂志先生にお願いしたんですね。都出さんは考古学のなかでも、歴史学にいろいろ発言ができる人なんです。この分野もタイプがいろいろあって、考古学は本当に発掘のほうだけという方が圧倒的に多いんですが、都出さんは日本史に来られても違和感なくやってもらえるだろうというので来てもらったんです。

そのとき、日本史は助手ポストが2つあったので、そのあと助手ポストを1つ出して考古学講座をつくりました（1988年）。ちょっと国史としては痛かったのですが。そうしたら、なかなかうまくいって、いまはすごいでしょ。うちの考古学の卒業生が、大阪府などのいろいろなところへ入っていて活躍していますよ。これは都出さんや卒業生の能力によるけれども、私たちが期待したとおりになったと喜んでいます。

あと講座のなかで、そういったことは、ほかにはなかったと思いますけど。

菅 よく教養部の先生のなかでは、教養部を格差を付けて見られるというお話をうかがうことがあるのですが、先生のお話からいくと、特に日本史・国史についてはそういうことはなくて、教養部と文学部の先生方は協力して学生の教育にあたられていたということですね。

脇田 その教養部と学部との関係というのは、

一般的には微妙なんですね。ただ、私は部落史などもあって教養部へ授業に行っていましたし、日本史の場合は、日本史の卒業生で阪大の教官になられたのは長山先生が最初なんです。長山先生はどう思っておられたか知らないけど。そういう方に入っていたらいい、いろいろつながりがあってよかった。長山さんはなかなかの方で、私は仲良くしていたし、それほど大きい問題はないですね。

教養との関係で言うと、ほかはあまりなかったかな。私は同和問題の関係で講義をしたくらいで。いまの阪大にはないけれども、浪高（旧制浪速高等学校）系と大高（旧制大阪高等学校）系ではちょっと付き合いが違っていたね。日本史では、時野谷先生と私が大高で、黒田さんは四高、梅溪先生が浪高なんです。それはあまり意識しないで仲良くやっていました。学閥とかについて言うと、どちらかというと阪大は新しい学校だから。

京大は戦後になって、日本史に関して言えば、大きな変動があったのです。それは教授の西田直二郎という文化史学の大御所が公職追放になったということです。そのあとは、阪大に来られた藤（直幹）先生と、京大の教養に行かれた柴田先生の2人が助教授でおられたのですが、結局、西洋史の原随園教授が日本史の世話をされた。しかし、原さんは文化史学では東京系の学問に対抗できないと考えられたようです。

文化史というのは非常に特徴のある学風で、われわれも若干影響を受けたのですが、いわゆる実証主義ではないんです。歴史でいうと文化史というのは、史料にあたって、そこから組み立てていくというよりも、もちろんそれもありますが、もう少し広く時代を見渡すようなところに重きを見る学風なんです。

それで原さんは、文化史では、東京に対抗できない。変えようというので、戦後、その文化史の系統を国史からなくし、私の指導教官であ

る小葉田淳先生がみえたんですね。私は小葉田先生にご指導いただいたので、それは非常によかったと思うんです。

ですから、藤先生は阪大へ来られて、文化史の流れで文化史学の伝統を受け継ぐつもりで、ずいぶん頑張っておられました。けれども実際には、どちらにしても、前のような文化史ではいけないものだから、全体に変わってしまったということでしょう。

しかし京大は戦前からある講座ですし、阪大は昭和23年にできているので、阪大はできてしばらくは、ちょっとしんどいところもあったと思うんですが、私が来たころぐらいからは変わり始めていて、いまだったら、それほど大きな違いはないですよ。どちらかというと、講座によっては阪大のほうが頑張っているかたちになりました。

大阪大学というのは、できたときは京都や東京から人がみえたということもあるけれども、私たちが来て、紛争が起こって、何とかやっているうちに一つに落ち着いてしまったのではないのでしょうか。

阪大生へのメッセージ

阿部 先生におうかがいしたかったことは、だいたいお話しいただいたと思うのですが、現在、大阪大学で学んでいる学生たちに、先生からメッセージを頂戴できれば、ありがたく存じます。

脇田 私は、先の本の後書にも書いたと思うのですが、大阪大学の学生さんは優秀だと思うんです。だけど、何となく自信を持っていない。例えば、東京や京都に対して、自信を持っていないような感じがするんです。そういうのは、よくないと思いますね。私は、もうちょっと自信を持って、仕事を打ち出していけばいいと思いますけどね。

私の教えた人は、けっこう、この近くの大学

へ入って、みんな頑張っているでしょう。それで「本を1冊ぐらいは書け」と私が言ったものだから、皆さん、早く本をまとめて、学位も取ってくれたし。だから、そういう意味では、なかなかいい線いっているんですけどね。

たしかに入学試験の関係では、大学によって差があるかもしれないけれど、実際の学問になってみると、必ずしもそれだけではない。入試は、かなり大きい条件ではあるけれども、それだけではないですよ。いろいろな意味での総合能力を考えると、阪大生は自信を持って、もうちょっと外へ出て行ったらいい。

例えば全国学会などへ出て行くと、東京とか京都の人は平気で発言をする。阪大の人は、そういうことに慣れていないと思ったんです。私が来たころは、まだ出来て間がなかったこともあるでしょうけれども。

ですから、そういうことは抜きで、もう少し主張したほうがいいのではないかと勧めました。けっこう、みんなやるようになってくれたと思うんですけど、そういう意味で、もう少し自信を持ってやったほうがいいのではないかというのが、いつも私が言うことなんです。

阿部 長時間にわたりまして、貴重なお話をありがとうございました。

脇田修名誉教授略歴

1931年3月 大阪市に生まれる

1948年3月 大阪府立北野中学校4年修了

1948年4月 大阪高等学校文科甲類入学

1949年3月 大阪高等学校1年修了

1949年7月 京都大学文学部入学

1953年3月 京都大学文学部卒業

1953年4月 京都大学大学院文学研究科入学

1955年3月 京都大学大学院文学研究科修士課程修了

1958年3月 京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学

1958年11月	住友修史室嘱託(1969年5月まで)	1990年4月	大阪大学文学部長(1992年3月まで)
1962年6月	京都大学文学博士(課程)学位取得	1993年3月	大阪大学出版会会長(1998年4月まで)
1966年4月	龍谷大学文学部助教授(1968年9月まで)	1994年3月	大阪大学停年退職
1968年10月	大阪大学文学部助教授	1994年4月	大阪大学名誉教授
1984年8月	大阪大学文学部教授(1994年3月まで)	現在	大阪市文化財協会会長 大阪歴史博物館館長 大阪大学名誉教授
1987年6月	大阪大学評議員(1989年5月まで)		

Memoir of Osaka University talked by Professor Emeritus Osamu Wakita

Masaki Kan and Takeshi Abe

This is a record of the talk of Professor Emeritus Osamu Wakita related to the history of Osaka University. Professor Wakita, who was born in 1931, studied at Osaka Senior High School. However, the school was closed after only one year from his enrollment. Therefore he had to take the entrance examination again, and choose the Faculty of Letters at Kyoto University. Professor Wakita majored in history of Japan at the faculty and the graduate school of the university. Leaving the university, he worked at the Sumitomo Archives from 1958, won the Ph.D. Degree at Kyoto University in 1962, became Associate Professor at Ryukoku University in 1966, and moved to the Faculty of Letters of Osaka University in 1968, when the students' riot occurred at many universities including it. Soon he greatly worked as a member of the newly established committee in the university about the discriminated students. Professor Wakita was promoted to professor in 1984, senator in 1987 and dean in 1990. He fostered many students, conducted his research about the history of the Edo period in Japan, and made a great effort to develop the Osaka University Press as Chairman. He became Professor Emeritus in 1994.